

あきもや
朝靄に霞む神宮の森

鈴音のような五十鈴川の瀬音

やがて神路山が茜色に染まり 太陽が夏の朝を告げる

ふるさとの風

～文月～

天地和合

— 露涼し 夏の五十鈴川 —

悠久の時を超えて流れ続ける五十鈴川。およそ二千年前、倭姫命が巡幸の際、五十鈴川のほとりに天照大御神の真なる鎮座地を定められたと伝えられる。

時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、「是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する国なり。傍国の可憐国なり。是の国に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教の隨に、其の祠を伊勢国に立て、因りて齋宮を五十鈴川の上に興てたまふ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。

—日本書紀 卷第六—

五十鈴川の名は神前へ供える御贄を「すすぐ」意から出たという。また、倭姫命が御裳の裾を濯がれたとの故事から御裳裾川ともよばれる。

于時河際仁志天。倭姫命御裳齋長。計加礼侍介留於洗給倍利。従其以降。際号御裳須曾河也。

時に河の際にして、倭姫命、御裳の齋長くして、計加礼侍りけるを洗ひ給へり。

それより以降、際を御裳須曾河と号くるなり。

—倭姫命世紀—

神域の山々の絶景、五十鈴川の清流の水音に包まれて宇治橋を渡る。

宇治橋は俗界から聖界への架け橋。真新しい檜の香りが清々しい。神苑の中、白く光る玉砂利を踏みしめて参道を進む。緑豊かな神苑は明治時代に作られた和洋折衷の珍しい形式。大正天皇が皇太子の時にお手植えされた記念樹の松が姿を見せる。火除橋を渡り内宮の神域に入る。一の鳥居をくぐり右手に降りると五十鈴川の御手洗場である。澄んだ流れに錦鯉が悠々と泳ぎ木々を映した川面は、まるで美しい絵織物のよう。

夏でも冷たい水で手を清めると心まで洗われる。敷きつめられた石畳は徳川五代將軍綱吉の母 桂昌院が寄進したものと伝えられる。御手洗場の真近に鎮まる瀧祭の神は、御神体の石が石畳の上に祀られているだけの簡素な社であるが、五十鈴川の守り神として重要とされる。河合淵（川の合流する地点）にあるため幾度となく社殿が流され、古来よりの治水への祈りの証が偲ばれる。夏の土用や八朔には五十鈴川の水を汲み瀧祭神に参り神棚に供えると無病息災。夏の風物詩となっている。

五十鈴川は神路山と島路山に水源を發したふた筋の流れがやがてひとつになり、神域を流れ伊勢湾に向かう。豊富な水は流れて清く古来より人々の生活を見守ってきた。水とともに生き水に育まれてきた日本の人々。水は太古の昔から天と地をつないできた。

神域に流れる清らかな川の流れは天にも届く川一。

千古の森の中、月の光に照らされ五十鈴川のせせらぎと木々の匂いに包まれる。

七夕の夜、天を仰ぎ見れば満点の星・・・

天の川の織姫と彦星の逢瀬に巡り合うかもしれない。

◆ 伊勢の文学と歴史の散歩 金剛證寺の歩み (中川埤梵/著 古川書店 L902/ナ)

◆ 倭姫命世紀 注釈 (和田嘉寿男/著 和泉書院 L174/ワ)

図書館だより

2012年7月号より